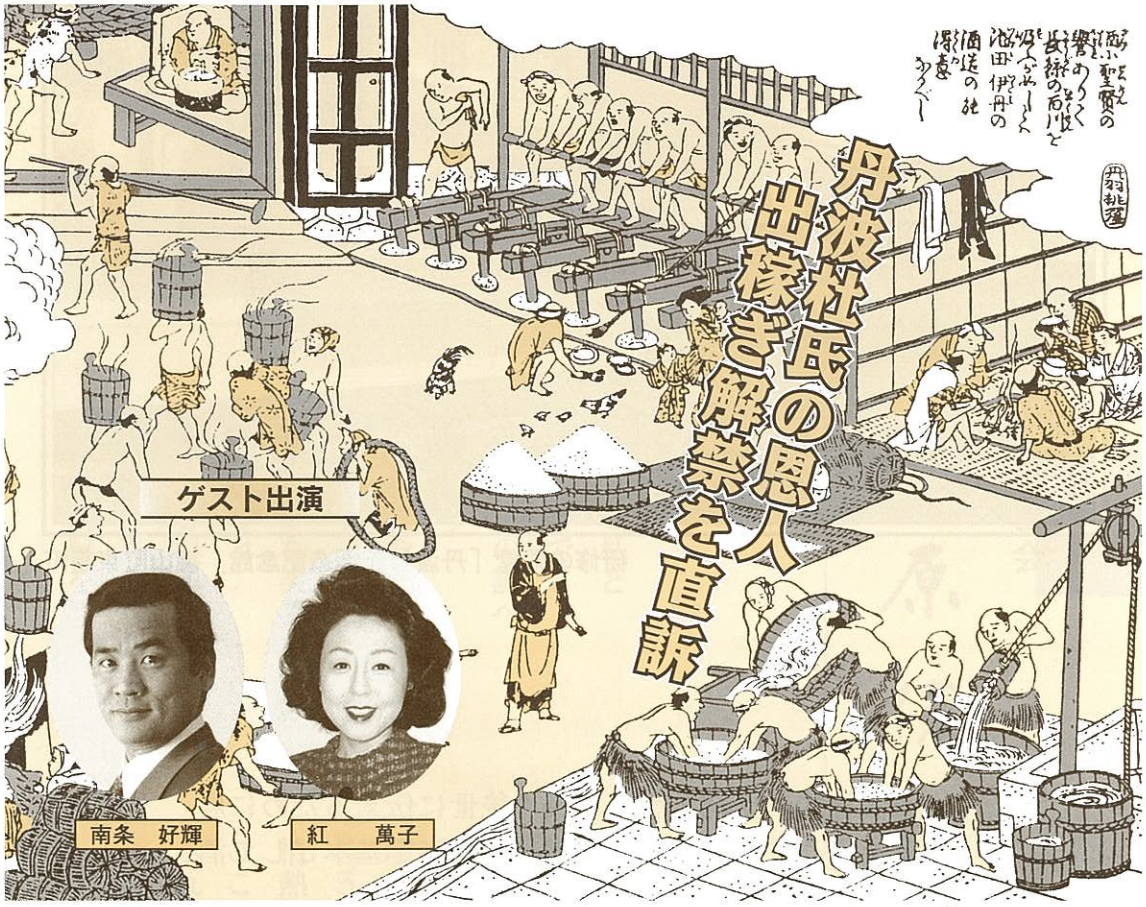
第９回兵庫のまつり **ふれあいの祭典**

阪神・丹波地域交流事業
先人顕彰劇

# 「市原 清兵衛」

●作／村 川　直　●演出／一 杉　忠　●構成／増田　忠治
出演／劇団伊丹市民劇場『やぎ』・演劇集団『いたみ』・演劇グループ『いたみ２期会』・丹波地域演劇愛好者
以上の皆さん　ほか合同出演




『続　丹波杜氏』より

**とき●8/31(日)　●開演 午後２時30分**

**ところ●たんば田園交響ホール　☎0795(52)3600**

■入場料／一般 3,000円・学生 1,000円《全席自由》
■主　催／ふれあいの祭典実行委員会、阪神・丹波ふれあいの祭典実行委員会、伊丹市、篠山町、西紀町、丹南町、今田町兵庫県、兵庫県教育委員会、㈶兵庫県文化協会
■後　援／丹波杜氏組合

研修の殿堂「丹波杜氏酒造記念館」篠山町東新町

丹波杜氏の伝統と歴史を長く後世に伝えるために展示室を中心に訓練室、研修室、事務室を基本として酒蔵風に全面改築された。
(鉄筋コンクリート造り　二階建　延７８５㎡)

平成元年１１月竣工

# こころ豊かに
# “ふれあい夢ひょうご”

ふれあいの祭典実行委員会
代表会長
兵庫県知事　貝原俊民

架け橋の夢ひらく
瀬戸の内海
わだつみの詩
四季に妙なる日本海
裾野ひろげる緑の山野
豊かな田園
不死鳥の息吹に
街よみがえり
風きり羽ばたく
希望の翼よ
いま兵庫ときめく
ふれあいの祭典

君と僕と
あなたと私と
ともに奏でる
ふるさとの調べ
助けあう
さわやかな汗きらめき
支えあう
にこやかな笑みひろげ
やさしさと
歓びの心で拓こう
真の豊かさみなぎる
新しい世紀を

老いも若きも
男も女も異国の友も
ひとつ舞台に
肩組みあって
歌おう
明日を彩どる希望の歌を
５５０万県民
情熱の炎あかあかと
こころ豊かに
ふれあい夢ひょうご

# 交流から新しい文化の創造を

## 阪神・丹波ふれあいの祭典実行委員会会長

篠山町長　瀬戸亀男

丹波杜氏のふるさと、ここ「丹波篠山」で、酒造り発祥の地伊丹市の市民のみなさんと丹波地域住民による先人顕彰劇「市原清兵衛」が上演されますこと、誠にありがたく、厚くお礼申し上げます。

伝統が生きる「デカンショの町篠山」。

私たちがそんなふるさとを語り合う時、三百年の歴史を刻んできた丹波杜氏を抜きに語ることは出来ません。

江戸時代中期から始まったといわれる丹波人の酒造出稼ぎ。

秋の取り入れを終えると、男たちは一家の暮らしを支えるため酒どころへ向かったのでした。

デカンショ　デカンショで半歳くらす
　　あとの半歳泣き暮らす

留守をあずかる蔵人の新妻の哀しみを歌った、昔のデカンショ節です。

出稼ぎの歴史は江戸中期から始まったといわれていますが、その理由は、当時、藩の年貢の取り立てが厳しかったことや、当地方は冬場の寒さが厳しいことから稲作以外の農業が出来ず、米を作る他に収入の道がなかったことが大きな原因のようです。

記録によれば、明治三十年代では、丹波地方から五千人の酒造出稼ぎ者があったそうです。今では機械化の進展や社会情勢の変化によって随分と少なくなりましたが、酒造りは、今日まで私たちの暮らしはもちろんのこと、町の経済や文化の発展に大きく貢献してきました。

過去のこうした歴史を振り返るとき、忘れてならないのは、自分を犠牲にして酒造出稼ぎの門戸を開いた市原清兵衛氏の存在であります。

篠山城跡の三の丸広場に清兵衛氏の顕彰碑が建立されており、今でも、酒造りを前に、杜氏のみなさんが一同に集い、その年の酒の出来映えを祈願して、全国の酒造りの地に出向いていきます。

時代は変われど、酒は生き物、杜氏の長年にわたる磨かれた技と勘が「うまい酒」をつくり出します。

酒造りの発祥の地「伊丹」、酒造りの匠の里「丹波」。長い交流の歴史の源を訪ね、今に生きる人々の手によって、しかも手づくりの演劇で再現しようとしています。

都市と農村の交流、そこから育まれる共生文化は、また新しいふれあいの文化を創造することでしょう。

福知山線の篠山口駅までの複線化完成など基幹交通網の整備と相まって、今や丹波は阪神都市圏域に組み込まれ、人的、物的交流がこれまで以上盛んになるものと思われます。

どうかこの公演が伊丹、丹波のみなさんのご協力によって成功し、相互の地域住民のみなさんの熱い思いが郷土文化振興に大きく貢献されることを祈念するものでございます。

最後に、今回の公演にご尽力いただきました多くの皆様方に心から敬意と感謝を申し上げご挨拶といたします。

# 「ふれあい」の心

伊丹市長　松下　勉

先人顕彰劇「市原清兵衛」が、阪神・丹波地域交流事業としてたんば田園交響ホールで盛大に上演できますことを心よりお慶び申し上げます。

今回の先人顕彰劇「市原清兵衛」は、伊丹市先人顕彰劇「伊丹―わが郷町」の上演をきっかけに、丹波地域で再演の声があがり、実現することができました。

伊丹市の先人顕彰劇は、昭和五十三年に第一作を上演して以来、数えて八回を迎え、毎回、郷土伊丹の史実・史話に題材をもとめ、市民によって総合プロデュースされた手作りの芝居です。こうした身近な、芝居を通じて先人の歩みとふるさとへの熱い思いを感じとっていただけたらと思います。

阪神・丹波は、隣接した地域であり、経済的・文化的にもお互い大きな影響力を持ちながら交流をしてきました。特に、古くから「丹波杜氏」と呼ばれている人達が、阪神の地場産業である酒造りを支えてこられたことは広く知られているところです。この先人顕彰劇「市原清兵衛」の公演をご覧になられた観客の方々は先人の偉大さと苦労に対して深い感動を受けられること思います。今回、丹波杜氏組合・丹波地域演劇愛好家の方々・演出の先生方・伊丹市の劇団等の協力により、すばらしい劇が上演されることを期待しています。

最後に、阪神・丹波地域の交流がますます発展しますことと、阪神・丹波地域交流事業・先人顕彰劇「市原清兵衛」のご盛会を心よりお祈りいたしまして、お祝いのことばといたします。

# ●阪神・丹波ふれあいの祭典実行委員会の構成

会長　瀬戸亀男（篠山町長）
副会長　松下　勉（伊丹市長）
〃　森口武治（西紀町長）
〃　杉本幸男（丹南町長）
〃　大上恭平（今田町長）
委員　満浦謙之
（財団法人兵庫県文化協会常任理事）
〃　村川　直
〃　一杉　忠
〃　増田忠治
〃　前川澄夫
（たんば田園交響ホール参与）
〃　田村昌和
（たんば田園交響ホールステージオペレータークラブ会長）
〃　澤田宣剛
（伊丹市市民文化部文化振興課長）

委員　小山剛久
（たんば田園交響ホール支配人）
〃　山本喜代治
（西紀町総務企画課副課長）
〃　広田実光（丹南町企画課企画係長）
〃　小林正和（今田町総務課企画係長）
監事　原　精一（丹波杜氏組合組合長）
〃　西田雅哉
（多紀郡広域行政事務組合総務課長）
事務局　森本剛史
（兵庫県生活文化部芸術文化課主査）
〃　宇野　茂
（財団法人兵庫県文化協会文化事業部）
〃　小松信一
（伊丹市市民文化部文化振興課）
〃　梶谷郁雄
（たんば田園交響ホール副支配人）
〃　出口源市
（たんば田園交響ホール主幹）

## 劇のあらすじ

**（序章）**

しとしとと降り続く雨の中、遠くからかすかに篠山節が聞こえる。とある農家の納屋で車座になった農民たちが話し合っている。

二年続きの不作の上に、厳しい年貢等の取り立て、加えて出稼ぎ禁止のうわさ、「何かよい方法はないものか」、「場合によっては訴えにいこうか」とまで話が出る。

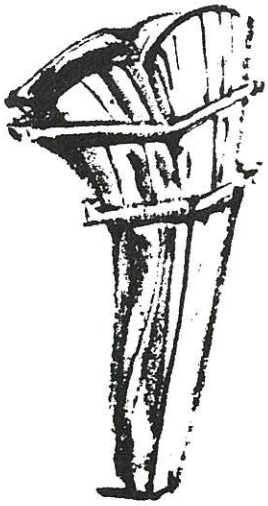
そこへ、市原村の肝煎が清兵衛を探しにやってくる。農民たちは肝煎によい方法を見つけてくれるよう頼むが、さて自分たちもどうしたものかと途方にくれる。

**（第一幕）寛政年間七月二十三日**

愛宕祭の宵の事。愛宕火の用意が進んでいるのに杜氏たちの到着が遅れている。篠山藩では「出稼ぎ禁止令」を厳しくし、酒造りのための「百日稼ぎ」などを制限しているからである。伊丹では、「百日稼ぎ」の禁令がどうあろうと、酒造りの杜氏・蔵人達が来ないと大打撃である。愛宕火の用意をしながら丹波杜氏・泉村の善兵衛一行の到着を待ちわびる伊丹屋の人達……。

やがて一行が到着、迎える主人や番頭たち、そして女中小春が心待ちにしていた蔵人佐七も姿を見せる。佐七の父親・市原清兵衛は身内の不幸続きで借金が増えているところへ凶作で年貢も滞り「抜け稼ぎ」でやっとのこと伊丹に入った。

酒蔵の塀と中庭。子供たちの遊びと笑い声。丹波から村役・吉蔵が来て、清兵衛の分散（破産宣告）を告げる。



大神楽

**（第二幕）第一幕の翌日**

猪名野神社の秋祭りの日。蔵人たちも休みの日。町衆も加わり気勢を上げている。思い詰めた清兵衛、気心の知れた作蔵に江戸表へ直訴することを打ち明ける。直訴は重罪、打ち首、獄門は覚悟のうえ。伊丹屋番頭・幸助にとっても「百日稼ぎ」の禁令は伊丹酒の生死に係わる重大事である。清兵衛の江戸への直訴のため、伊丹屋の手持ちの樽廻船「大王丸」の水夫に仕立てることを思いつく。江戸表まで三〇〇里の海路、大王丸の船頭・新蔵も男気を見せ、これを引き受ける。

篠山藩の江戸日誌に次の一文がある。「寛政十二年（一八〇〇年）十二月十四日、市原清兵衛・佐七父子江戸表江罷越訴状願之事」

**（第三幕）江戸青山藩邸**

江戸表藩邸の中庭。縄を掛けられ、打ち据えられた清兵衛親子。藩主青山忠裕に訴える。村の窮状、年貢に加え「寸志銀」という名の臨時の税まで……。何としてでも「百日稼ぎ」「他所奉公」の解禁を……と訴え、聞き届けられる。

**（エピローグ）**

直訴は重罪だが打ち首にはならず、縄を打たれ篠山に送られ、十一年余の入牢生活。しかし、直訴の後一年半後のある日、突然、藩は「百日奉行御差留之処勝手次第被仰之事」青山忠裕公の「御前御恩召」に付き、特別の仁志をもって新旧とも百日奉行を許すことになったと通達した。

その結果、丹波杜氏・蔵人たちが自由に伊丹に出入りすることになり、伊丹酒は再び活気を取り戻した。文化八年（一八一一年）四月、藩役人が立ち会いのもと、清兵衛・佐七父子は出牢したが、藩の優遇措置を拒んだため「国払い」となる。再び、藩の日誌によれば「文政三年（一八二〇年）市原村清兵衛父子摂州伊丹へ引越之事」とある。

丹波杜氏の恩人であり、伊丹酒の恩人でもある清兵衛親子を伊丹の人々は温かく迎える。

雨上がりの伊丹の空に大きな虹の橋がかかった。

それは、丹波と伊丹をつなぐ心の橋でもあった。人々は思い思いの感慨をこめてこの虹を見上げたのである。

## ◆スタッフ◆

作／村川直
演出／一杉忠
構成／増田忠治
舞台監督／荻野円蔵
舞台美術／板坂晋治
照明／菟原功
音響／小林純一
演出助手／川端ヒロユキ
衣裳／田口良二
〃／田崎一枝
〃／竹若和美
〃／藤本友子
かつら／丸善かつら
大道具／たんば田園交響ホールステージオペレーター
小道具／〃
製作／たんば田園交響ホール

## ◆たんば田園交響ホール・ステージ・オペレーター◆

（舞台）
浅倉陽子
市村美紀
臼井一郎
大内和彦
岡沢幹治
小笠原明子
奥田幸雄
亀田真知子
川端ヒロユキ
佐古田恭子
滝本信男
辻太一
西山富
野瀬眞利
野々口善之
野村春一
林庸子
寳崎正史
細見輝雄
宮城信之
向井祥隆
山本弘子

（照明）
青野公彦
井階富美子
石橋司郎
岡沢正介
荻野徹
桂幹夫
河原勇
小西弘幸
酒井直子
清水明
下山久美子
高井三千代
中西誠一
西田典弘
二宮利弘
藤井哲夫
前川英也
松尾俊和
森口朝恵
雪岡則子

（音響）
穴瀬綾子
穴瀬智子
荒木銀子
井ノ口精伸
梅本りな
大西ひろ美
荻野直貴
荻野充
木下博文
小西忠男
駒谷登
酒井由雄
下中克憲
園田香
田村昌和
丹後好裕
中尾聖三
中西隆一
中本日出義
西本義孝
畑谷敦子
松笠洋三
宮城晃三
三宅幸子
山田俊彦
山本晴朗

## ◆事務局スタッフ◆

森本剛志
宇野茂
小松信一
前川澄夫
小山剛久
梶谷郁雄
出口源市
中道瑠美子
小林純一
菟原功
若狭美希

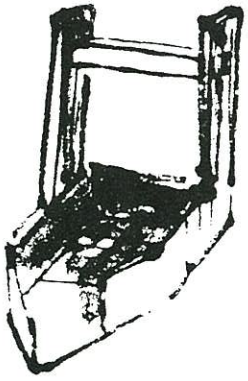
## キャスト

| | | |
|---|---|---|
| 市原村百姓 清兵衛 | 西浜 利之 | (◎) |
| その伜 佐七 | 式地 裕之 | (◎) |
| 市原村百姓 みつ | 小谷 光子 | (2) |
| その娘 なつ | 植村 鮎莉 | (コ) |
| 市原村肝煎 吉蔵 | 山口 耕道 | (丹) |
| 泉村 杜氏 善兵衛 | 南条 好輝 | (丹・ゲ) |
| 脇杜氏 伊八 | 藤井 宣良 | (丹) |
| 蔵人 文太 | 足立 義則 | (丹) |
| 〃 久蔵 | 松尾 幸哉 | (丹) |
| 〃 平治 | 荻野 充 | (丹) |
| 〃 惣太 | 中村 聡志 | (丹) |
| 〃 宗八 | 棚橋 直人 | (丹) |
| 伊丹屋主人新左衛門 | 増田 忠治 | (◎) |
| その娘 ゆき | 津田 智子 | (◎) |
| 番頭 幸助 | 和田 勇二 | (※) |
| 手代 松七 | 足立 佳則 | (フ) |
| 下男 作蔵 | 福永 安男 | (2) |
| 女中 あき | 浜田佳枝子 | (◎) |
| 〃 小春 | 佐々木 愛 | (※) |
| 坂田屋番頭 儀助 | 足立 繁 | (※) |
| 樽廻船船頭 新蔵 | 井上 彰 | (※) |
| 見知らぬ男（隠密） 政吉 | 宮村 信吾 | (フ) |
| 蔵人 松蔵 | 信田 誠博 | (フ) |
| 〃 与吉 | 松本 猶喜 | (◎) |
| 町の衆 秀七 | 式地 廣 | (◎) |
| 〃 仁助 | 湯本 秀雄 | (◎) |
| 屋台の亭主 | 境 良夫 | (◎) |
| おかみ | 増田 忠治 | (◎) |
| 篠山藩主 青山忠裕 | 安部 政子 | (2) |
| 江戸藩士 八上忠左衛門 | 山本 哲也 | (※) |
| | 照屋 盛徳 | (◎) |

| | | |
|---|---|---|
| 江戸藩士 小椋又八 | 佐藤 智徳 | (◎) |
| 足軽A | 境 良夫 | (◎) |
| 足軽B | 湯本 秀雄 | (◎) |
| 男の子 武ちゃん | 松田 未来 | (コ) |
| 〃 勘ちゃん | 朝日 梓 | (コ) |
| 〃 秀ちゃん | 松田ひかり | (コ) |
| 女の子 おはつ | 西川 文乃 | (コ) |
| 男1 | 荻野 充 | (丹) |
| 男2 | 中村 聡志 | (丹) |
| 男3 | 藤井 宣良 | (丹) |
| 男4 | 松尾 幸哉 | (丹) |
| 男5 | 棚橋 直人 | (丹) |
| 男6 | 足立 義則 | (丹) |
| 女1 | 出口まり子 | (丹) |
| 女2 | 藤本三千代 | (丹) |
| 女3 | 坂部 京子 | (丹) |
| 老婆 | 酒井奈加子 | (丹) |
| | 梅本はる花 | (丹) |
| こども おちま | 梅本 若葉 | (丹) |
| 〃 弓ノ助 | 小南 茜 | (丹) |
| 〃 おあい | 青野 裕一 | (丹) |
| 〃 茂一 | 斎藤里佳子 | (丹) |
| 〃 おあや | 梶谷 愛美 | (丹) |
| 〃 おしず | 河原 麻衣 | (丹) |
| 〃 おきく | 井関早百合 | (丹) |
| 〃 おふみ | 出口 由麻 | (丹) |
| 〃 おかず | 紅 萬子 | (丹・ゲ) |
| 進行役 | 久保田磨希 | (丹・ゲ) |
| 酒造り唄・指導 | 原 精一 | (丹) |
| 〃 | 中沢 政雄 | (丹) |
| 〃 | 籾井 計三 | (丹) |

| | | |
|---|---|---|
| 酒造り唄・指導 | 森本 正 | (丹) |
| 尺八 | 足立 章 | |
| デカンショ踊り | 篠山デカンショ節保存会 | |

〈注〉
(※) 劇団伊丹市民劇場「やぎ」
(◎) 演劇集団「いたみ」
(2) 演劇グループ「いたみ2期会」
(コ) 伊丹公募による子役
(フ) 伊丹フリー
(丹・ゲ) 丹波・ゲスト出演
(丹) 丹波地域演劇愛好者



よだれかけ

西浜利之

福永安男

山本哲也

増田忠治

井上　彰

松本猶喜

足立佳則

式地裕之

足立　繁

和田勇二

信田誠博

式地　廣

境　良夫

佐藤智徳

照屋盛徳

宮村信吾

安部政子

浜田　佳枝子

小谷光子

湯本秀雄

松田未来

松田　ひかり

佐々木　愛

津田智子

朝日　梓

西川文乃

植村鮎莉

南条好輝

**プロフィール**

NHK大阪放送劇団から劇団五期会を経て、現在はビックワンウエストに所属。関西を中心にTV、舞台、ナレーションにと幅広く活躍中。上方際物シリーズ、人権シリーズでは、自作自演で注目を浴びる。

（関西大学卒　兵庫県出身）

**〈主なる出演作品〉**

**◆TV**

『ふたりっ子』（NHK）
『ええにょうぼ』〃
『この指とまれ』〃
『命の現場から』（MBS）
『必殺シリーズ』（ABC）他

**◆舞台**

『曽根崎心中』
『12人の怒れる男』
『マクベス』
『変身』
『男女浮世回舞台』
『けったいな話』他

紅　萬子

**プロフィール**

上方小劇場を経て、劇団「男と女」を結成。現在「別嬪倶楽部」を主催。酒脱なおしゃべりでTVタレントとしても活躍中。また人脈の広さを利用して、関西有数の舞台プロデューサーとしても定評がある。

（神戸松蔭女子短期大学卒　大阪府出身）

**〈主なる出演作品〉**

**◆TV**

『いちばん太鼓』（NHK）
『木綿のハンカチーフ』〃
『甘辛しゃん』〃
『金曜生き生きタイム』（SUN）他

**◆舞台**

『贋作・タクシードライバー』
『ゴクドーを待ちながら』
『二人でチキンを』
『ザ・近松』
『男女浮世回舞台』他

# 出演者紹介

松尾幸哉

足立義則

藤井宣良

山口耕道

出口　まり子

棚橋直人

中村聡志

荻野　充

梅本　はる花

酒井　奈加子

坂部京子

藤本　三千代

斉藤　里佳子

青野裕一

小南　茜

梅本若葉

出口由麻

井関　早百合

河原麻衣

梶谷愛美

# 「ふれあい」の心

作者　村川　直

伊丹の先人顕彰劇第八作の主人公は伊丹の人でない「市原村の清兵衛」さんですが、劇そのものは「伊丹の芝居」になっています。これを清兵衛さんの地元で上演されるので、伊丹では気づかれなかったボロが出ないかと心配です。幸い、演出さんに手を入れて頂いた序章、杜氏さんや蔵人さん、その他地元の方々が大勢出演されるので、どんな「顕彰舞台」ができ上がるか楽しみにしています。

丹波杜氏については組合でまとめられた「丹波杜氏」があり、伊丹の酒造りでは前関西学院大学学長の柚木学先生の著作があり、主人公については地元の歴史家の嵐瑞澂さんの「義民・市原清兵衛」があります。歴史的な事実が揃っていますので、あとはストーリーです。といっても、丹波と伊丹の地域交流というだけではドラマとして弱く、やはり、丹波の人と伊丹の人を強く結び合わせなくてはなりません。

伊丹には天平時代の僧行基ゆかりの昆陽寺や昆陽池があり、「利他の教え」を残しています。利他とは思いやりです、やさしさの心です。篠山はどうでしょうか。山陰出張の帰途、途中下車して歩いた町に「やさしさの文化」を感じました。幸い、清兵衛さんの菩提の西方寺は天台宗です。天台宗の理念は「忘己利他（もうこりた）の教え」です。

幕藩体制がガタつき始めたとはいえ厳しい時代です。労働力の流出、情報もれを防ぐために容赦しない閉鎖された地方から江戸への道はどうでしょうか。天引峠を越えて東海道をムシロ一枚、杓子一本で親子が物乞いしながら江戸へ行けたでしょうか。箱根越えが無理なら「樽廻船」に乗せてみたいと切り出したとき、嵐先生は「ふむ、小説の世界ですな」と苦笑されていました。海上の道が開かれて「清兵衛親子」は丹波をあとにしました。

酒造りを通して「ふれあった心」に、伊丹の人々が「おおきに」、篠山の人々からは「おっきに」と言って頂けたら幸いです。

# 思いつくまま

演出　一杉　忠

「デカンショ、デカンショで半年暮らす、あとの半年寝て暮らす」　初めて聞いたとき、なんとだらけた怠け者の唄よと、子ども心に思ったものだ。十五も年の離れた兄が、バンカラな風潮の残った旧制の高校時代に家で歌っていたものだから、高校の寮歌ぐらいにしか思っていなかった。れっきとした丹波篠山の民謡と知ってからも、この歌の歌詞の多様さには、正直言って頭をひねった。まあ、民謡というものは、発祥から伝播まで、いろんなものが混じりあってくるのが普通だから、諸説がいろいろあっても不思議ではないが、「丹波篠山、山家の猿が、花のお江戸で芝居する」これもまた頭をひねらせる歌詞だ。

まあしかし、とにもかくにも花のお江戸で命をかけて大仕事をした清兵衛の芝居を、地元篠山でやるわけだから、この一貫性がないというか。おおらかな「デカンショ節」で、伊丹とは一味違った丹波の味付けをしてみようと思っている。

丹波の百姓が、通行手形もなく何故江戸まで行けたのか、どうして屋敷の中へ入れてくれたのか不思議なことの多い清兵衛だが、伊丹が全面バックアップし、樽廻船を使ったとする、この台本の「村川説」が、一番信憑性が高い気がする。あと何十年もしたら、この説が俗説として一般的になるかもしれないてな夢も面白そうだ。

この芝居は、伊丹で上演し清兵衛を媒体として、丹波と伊丹の関わりの深さを再認識したが、地域と地域の結び付きが、産業と技術者集団でつながるという大変ユニークな構図になっているが、今はあらゆるものが機械化されたため、酒造りも、機械が中心になり、杜氏の仕事も蔵人の仕事も変ってしまった。時代の流れからすれば、それもある部分では仕方のないことだが、丹波杜氏の技術の高さと、それを生んだ丹波の誇りはいつまでも大事にして欲しいと願っている。

丹波の人たちと一緒に仕事をして、本当に良かったと思う。それぞれが仕事を持ちながら、創造の仕事に一生懸命取り組んでいく姿勢は、見ていて清々しいし、ものすごく懐かしい。ともすると請負的な仕事のやり方が多く、おまけに創造の仕事に携わっていても、一つを言えば、一つしかやらない人たちが増えてきてる中で、自分たちで考えて広げていく面白さを見つけているやり方は素晴らしい。

私たちの仕事は終点のない仕事だけに、どこまでいってもOKがない、けど目をつぶってしまうとすぐOKになる、そして自己嫌悪におちいる。自己嫌悪におちいる間はまだ救われるのだが、それもなくなったら、創造の仕事はやめたほうがいい。と、思いながらストレスを無二の親友として、私も続けています。どうか丹波のスタッフの皆さん、建物の素晴らしさと同様に、素晴らしい創造の世界を産みだし拡げて下さい。

最後に、南条さん、紅さんありがとう。また手伝って下さいね。

# 縁は異なもの

構成　増田　忠治

「縁は異なもの」という諺がある。これは男女の不思議な縁を云い表わしたものだが、世の中には、他にも、この諺のあてはまる事象に出会うことがよくある。

今回、篠山のたんば田園交響ホールで公演することになった先人顕彰劇「市原清兵衛」に出演する伊丹のアマチュア劇団員達と、丹波地域の演劇愛好者や、杜氏組合の方々との出会いも、正に「縁は異なもの、味なもの」と云える出来事ではないだろうか。

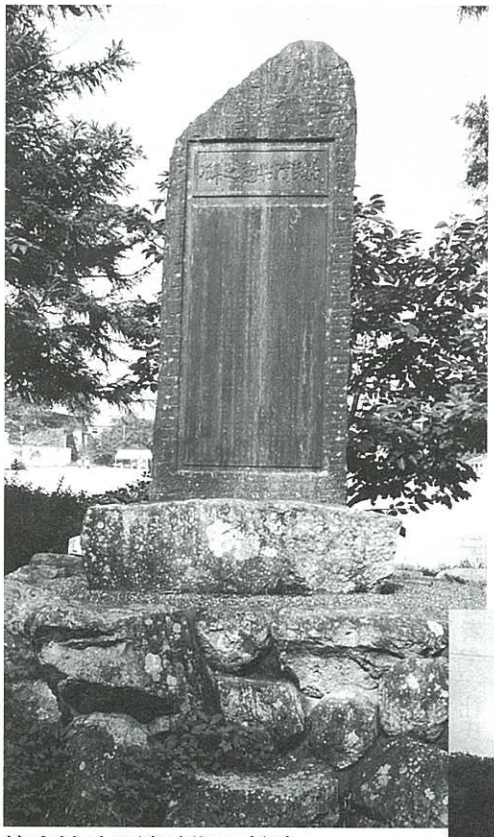
我々伊丹の市民文化運動の担い手を自負する「芝居気違い」の仲間達は、約二十年位前から、伊丹の歴史と文化の発展に貢献してきた人達の業績を称え顕彰するため、市や、多くの市民団体などの協力を得ながら、先人顕彰劇や、その他の自主公演を続けてきたが、今回の公演の基礎となった伊丹市先人顕彰劇第八作「伊丹―わが郷町」―伊丹酒を救った市原村清兵衛を助けた伊丹の話―の上演に当っては、篠山町の郷土史に造詣の深い嵐瑞澂先生の「義民伝・市原清兵衛」を中心に、丹波杜氏組合発刊の「丹波杜氏」「続丹波杜氏」などを参考に戯曲化が進められ、江戸時代の伊丹の経済・文化の発展の拠り処となった伊丹酒と、丹波杜氏らとの関係、特に、その救世主となった市原清兵衛が江戸表へ直訴した寛政十二年（一八〇〇年）から二十年後の、文政三年（一八二〇年）に、息子佐七と共に伊丹に移り住んだ事が、篠山藩日記に明記されており、「市原清兵衛」を丹波の酒蔵働人の恩人として地元で崇拝、顕彰されるのは当然としても、我々伊丹市民が、同じく伊丹の歴史上の優れた人物として評価し、「先人顕彰事業」とし公演に踏み切ったのも、決して間違いではなかったと確信している。

ともあれ、今回の第9回兵庫のまつり―ふれあいの祭典　阪神・丹波地域交流事業　先人顕彰劇「市原清兵衛」の公演成功のため、伊丹の3劇団が総力を結集して練習に励み、丹波地域の演劇愛好者の方々と力を合わせ、観客の皆様方にご満足いただける舞台を作り上げる事ができると自負しているが、我々アマチュア劇団の演技不足を補うため、南条好輝、紅萬子と云うすばらしいプロフェッショナルのゲスト出演を得る事ができたのは、百万の援軍を得た思いである。

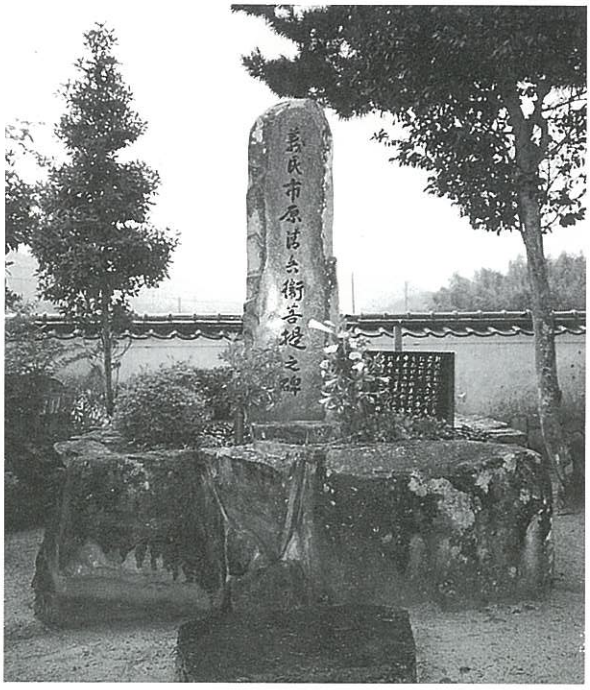
正に「縁は異なもの」である。これに、江戸時代からの有名な人形浄瑠璃の一つ「夏祭浪花鑑」の中の名台詞「団七始終をとっくと聞き、縁につるれば遠の物（唐の物）と、こりゃ珍しい出合いじゃな」の語源となった「縁につるれば唐の物を食う」の諺と併せ、義民「市原清兵衛」が取り持つ縁として、丹波・阪神地域の文化と人の交流が促進されればよいと思う。幸い昨年十月九日、近松門左衛門ゆかりの地の「尼崎未来協会」主催による―演劇列車フォーラムから「まくあけ『演劇街道』」がすでに文化交流の先鞭をつけており、加えてJR東西線の開通による足の便の拡大により、この交流に一層拍車が掛けられることを期待するものである。

# 丹波杜氏の恩人

# 市原 清兵衛

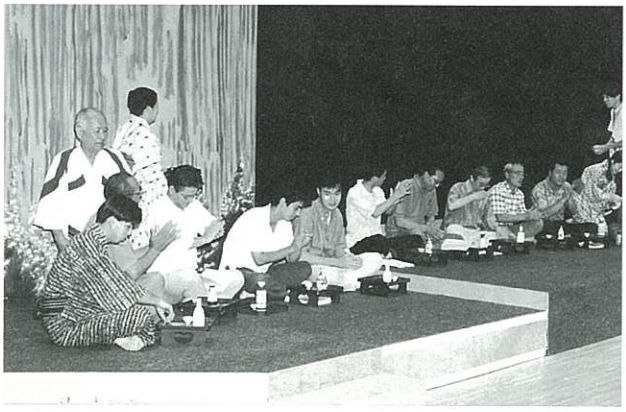


篠山城址の清兵衛顕彰碑




市原村清兵衛菩提碑（今田町西方寺）

市原村清兵衛
生誕地記念碑
（今田町市原）



稽古風景

# 解説

「愛宕火（あたごび）」

防火の神徳で有名な京都嵯峨の愛宕山の山頂に祀られている愛宕（阿多古）神社は、全国に八百の末社がある。現代でも七月三十日の千日参りの夜は、全山に提灯の明りがつき、「火廼要慎」と書いた札（ふだ）を頂いて帰る人が列をなす。

江戸時代の伊丹では、愛宕権現を祭る社が多く、火難を遁れるように祈願した。酒造家は薪を多く使い火を焚くため、旧暦七月二十四日「愛宕火」といって、伊丹本町通りに提灯（ちょうちん）をともして愛宕祭が行われ、町は賑わった。寛政十一年、大坂の木打礼恭（兼葭堂）が刊行した「日本山海名産図会」に「酒家の雇人此日より百日の期を定めて抱えさだむるの日にして、丹波・丹後の働人多く輻奏すなり」とある。伊丹の梶曲阜も「有岡古続語」で愛宕火と神事について書いている。

**「市原村」**

多紀郡今田町市原、江戸時代は今田組市原村。陶器の里の立杭（たちくい）から西の山一つ「隔てたところにある。播州姫路、社（やしろ）から京都へ向う京街道節にあり、今田（こんだ）には本陣と脇本陣も置かれていた。清兵衛の家は市原村の中央から西よりの少し高台にあり、事件後は畑になっていた。現在ここに「義民市原清兵衛生誕の地」（兵庫県知事貝原俊民書）の碑が建っている。

**「清兵衛の家庭」**

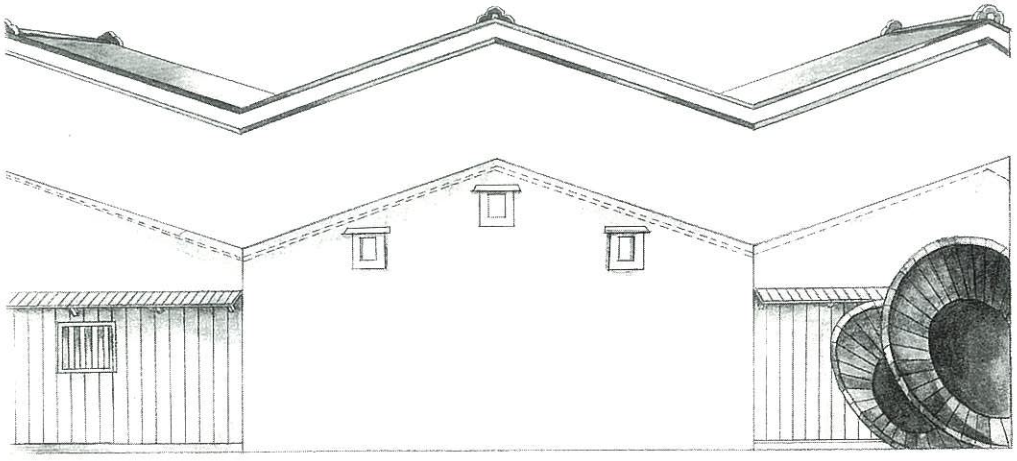
市原村の家は小さいながら自分の持ち家で田畑三反、家の後の小さな山を持っていた。清兵衛は宝歴五年（一七七五）生まれと推測されている。十五歳のとき母が、二十一歳のとき父が死亡。兄が病身だったので戸主となって働いた。二十四歳のとき兄死亡。結婚した年は不明だが、美人だった女房も病気がち、長男佐七に続いて、次男、三男を生んだあと清兵衛三十二歳の年、妻も死亡した。生活を維持していくためには相当苦しく、天災による凶作続きで年貢も収められず、「分散の儀」を申し付けられたと藩日記に出ている。（嵐瑞澂著、義民伝市原清兵衛）

**「明和、天明、寛政の時代」**

歴史でいわれる「田沼時代」で、幕府は経済を活性化させるため、商業資本と結んで大胆な経済政策を行ったが、裏では悪徳商人と高級官僚が結託して収賄や汚職もひどかった。テレビや映画の時代劇に出てくる大岡越前守や遠山の金さんが活躍した時代である。だが明和七―八年、諸国は干ばつ、水害の天災地変が続き、九年には江戸の大火、天明三年の浅間山の大噴火が引き金となって天明の大飢饉が始まって、社会は不安と危機状況だった。

**「西方寺」**

今田町今田新田にある天台宗の古寺。清兵衛の菩提寺。現代の住職さん大槻善実権大僧正は「篠山城や京都の桂にある酒の神さん松尾大社の参道に清兵衛さんの顕彰碑があるのに、生まれ故郷の市原にない」ことから有志によって寺内に「義民市原清兵衛菩提之碑」が昭和六十二年十一月に建てられた。「毎年七月二十八日、郷土の烈士清兵衛さんの追善供養を行っている」と。静かな村の中にある西方寺の境内に榧（かや）の古木（樹齢三百年）、横に二〇㍍ぐ



らい枝を広げた見事な山茶花（さざんか）の古木（樹齢六百年）、白と赤の花が混在する椿の古木、桜の老木があり、四季を通じて花を咲かせている。

**「杜氏」（とじ）と「蔵人」**

江戸時代の伊丹では頭司、あるいは親司とも呼んでいて、蔵元の酒造家から委嘱されて蔵人を組織し、酒造りの全責任を負っていた。杜氏（おやじさん）を補佐する脇杜氏（頭＝かしら）、代司（だいし）は麹仕込みの責任者、酛廻り（もとまわり）は酛仕込みの責任者で上酛廻り、下酛廻り。釜屋（かまや）は蒸米の責任者、道具廻し（道具類の整備の責任者）で内道具廻し、外道具廻しの八人が役人（やくびと）がいた。このほか、上人、中人、下人、追廻し、飯炊まで蔵人を構成していた。

**「酒造りと蔵人」**

精米、洗米、蒸米、麹仕込、酛仕込、しぼり、滓引（こりびき）火入れ、貯蔵の順に行われる。江戸時代は、「愛宕火」の旧暦七月二十四日、丹波から伊丹に着いた杜氏・蔵人は総仕込みに先立って大桶や造り桶、酛立て道具の手入れと洗い出しなど、洗物入込み（秋洗い）から始まり、仕込みが一段落する「甑仕舞（こしきじまい）」で、殆どの蔵人は給銀の精算と土産に酒と酒粕を貰い、家族の待つ丹波へ旅立った。第二陣は総仕舞いを終わり、酒焚き要員の役人を残して殆ど帰郷する。さらに、土用洗いや洗染めの「夏居三十日」は杜氏、脇杜氏に限って認められた。

**「酛始め」（もとはじめ）**

伊丹市史三百四十三頁によると、新酒仕込みは八月二十五日、間（あい）酒は八月二十七日、冬酒十月十一日、前寒酒十月十六日、春酒は一月二十三日とあり、年一回の仕込みから「四季酒」の仕込みが可能になっていく。江戸下り酒は、「早造り」をして船に積み込み、輸送の間に「丹醸」になるように工夫されていた。

**「杜氏の来た道」**

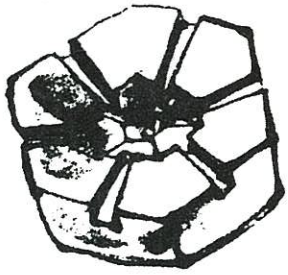
丹波からは、古市横丁の坂で妻子と別かれて日出坂峠を越えて本庄、広野、道場、生瀬（なまぜ）ここで分かれて宝塚、川西、小林（おばやし）門戸、広田、西宮、今津へ向うコース。生瀬から米谷（まいたに）安倉（あくら）、昆陽（こや）、千僧、伊丹郷町（ごうちよう）の酒蔵へ向うコース。

丹波の山側を通る道は、小枕から母子峠越えのコース。日置から古坂峠を越えて後川（しつかわ）、西峠から一気に猪名川筋を下っていくコース。福住から九里に九つの峠（七廻り峠、天王峠、原ケ谷峠、浮峠、稲荷坂峠、カイモ峠、大部峠、辻の岡から中山峠、横山峠）を越えて池田、伊丹へ出る古い時代のコース。

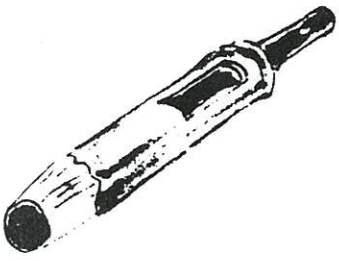
灘へは道場、唐櫃、裏六甲から六甲山を越え、石屋川、住吉川を下っていった。

**「百日稼」（ひゃくにちかせぎ）**

固有名詞になっているぐらいで、秋の彼岸から春三月までの百日間、酒蔵で働いた。丹波からの酒造出稼は元禄の頃からで、明和三年（一七六六）の記録では、篠山藩領から他領へ出る奉公人は二千人近くいて、うち八～九割は伊丹、西宮、灘などの酒造りの「百日稼」だった。清兵衛父子の直訴は「百日稼」が制限され、非合法で領外へ出る者の取締りを強化し、更に禁止したことから起きた。



さる



竜の口

**「江戸下り酒」**

当初、四斗樽二丁、または二斗樽四丁を馬の背に振り分けて、宿場から宿場へと陸路で江戸に送っていた。しかし、江戸の大量の需要に応じるため、海上輸送が工夫された。

寛政から文化文政期の下り酒は百八十万樽に及び、百万都市、江戸の武士・町人の飲む酒の七～八割は、上方からの「下り酒」だった。

**「海上輸送」**

当時の大型の帆船は北海道の昆布などの産物を輸送するため北前船が日本海で活躍していた。大坂と江戸の間の海上輸送は、元和五年（一六一九）に、紀州の富田浦の二百五十石船を堺の商人が雇い入れ、大坂から酒や醤油、食酢、和紙、綿、布、漆器、畳表などを積んで江戸へ送る「貨船運漕」が最初。この船は船倉に酒樽、醤油など重い物を積み、甲板などの上積みは和紙や漆器、畳表などの軽い物を積み、舷側に積荷の落下を防ぐために垣立といって格子の戸板を立てた。この格子の格好が菱形だったので「菱垣廻船」（ひがきかいせん）と呼ばれるようになった。その後、積荷などのトラブルから、酒問屋が酒樽専用の帆船を雇ったり、建造して持ち船にするなど、江戸下り酒の輸送は飛躍的に伸びた。

**「樽廻船と新酒一番船」**

江戸下り酒は、大阪から海上の里数で百八十二里半、一里四キロとして七百三十キロ。ずっしりと重い積荷を「風まかせの船旅」である。早くて一週間、通常二週間半、悪天候だと百日を越えることもあった。

江戸下り酒は、前年の寒造り酒を夏を越させて熟成する酒を充当していたが、香りと味の品質競争から「新酒」を早く送り届けるために一番船（先走り）、二番船（後走り）と続いた。特に一番船の競争はお祭り騒ぎで西宮に終結した西宮、灘、伊丹の新酒を積んだ一番船が一せいにスタートした。

樽廻船は当初の二百～三百石船から五百石船、七百石船、千石、千五百石と大型化した。千五百石積の樽廻船の大きさは長さ三六㍍、幅七・五㍍、酒樽三百樽を運んだという。

**「青山家」**

青山忠成は三河譜代の直属国の一人で家康の小姓を勤め、のち秀忠に属した。家康の関東入国（天正十八年＝一五九〇）の八月一日、内藤清次とともに「八朔」の総見役、関東総奉行を勤めた。その子、青山忠俊は、酒井忠世、土井利勝とともに秀忠の側近三人として世子家光（幼名竹千代）の補導・教育役を勤め、元和二年（一六一六）老中になる。家光が新将軍になってからも教育係の態度を続け、公衆の面前でも家光を叱りつけたため、家光の勘気に触れて改易された。一時没落した青山家を青山宗俊の代に再興し、のち青山忠重の時、亀山城（現代の亀岡市）に移り、寛延元年（一七四八）青山忠朝が国替えで篠山城に入った。

**「篠山城」**

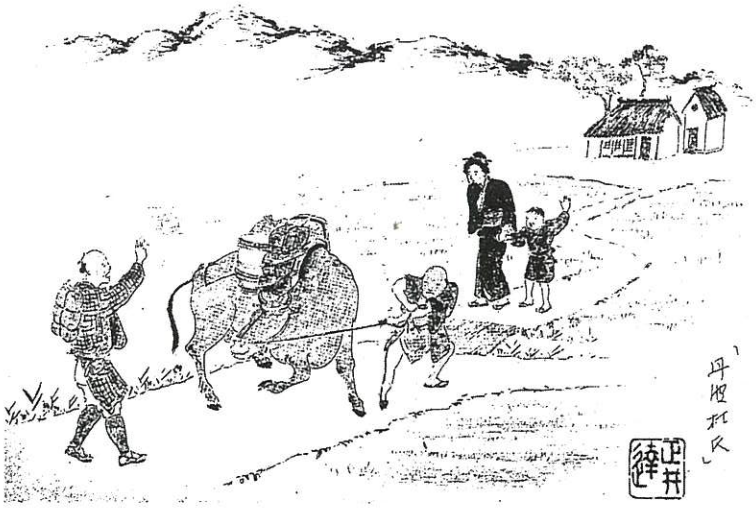
家康の庶子松井松平康重が慶長十四年（一六〇九）、常陸の笠間から丹波八上城に入り、江戸幕府の最西端の拠点として篠山城を築城する。八代城主・松平信岑の時、丹波亀山城へ転封。替って九代城主として青山忠朝が入る。十代忠高の時、酒造出稼規制が強化される。十一代忠講（ただつぐ）が二十一歳で死去したため、弟の忠裕（ただやす）が十二代城主になる。

**「青山忠裕（ただやす）」**

天明五年（一七八五）襲封する。江戸在府で寺社奉行、若君・家慶付きの若年寄。寛政十二年（一八〇〇）十月、大坂城代を命じられる（三十三歳）。江戸在府中で大坂行きを準備中、その年の暮れの十二月十四日、市原村清兵衛の直訴。享和二年（一八〇二）京都所司代。文化元年（一八〇四）正月、老中に任命され、天保六年（一八三五）までの三十二年間、老中職にあり、その間、文政十年（一八二七）五月七日一万石加増されて六万石になる。

篠山藩主として在位五十年、教育を奨励し漢書の翻刻、勤倹尚武の気風を貫き、敬老を教え、七十歳以上の老人に特別手当として銀を与えた。また死刑を禁止した。篠山城址の青山神社には忠俊と並んで中興の

藩主として合祀されている。



## ―参考之献―


「伊丹市史」第二巻・第四巻　市史編纂専門委員会編昭和四六―四八年

「酒造りの歴史」柚木　学　雄山閣出版　昭和六二年

「義民・市原清兵衛」嵐　瑞澂（自家本）　昭和三六年

「丹波篠山城とその周辺」嵐　瑞澂　篠山史友会　平成四年

「丹波杜氏」小林米蔵編　丹波杜氏組合　昭和三二年

「宮水物語」読売新聞阪神支局編　中外書房　昭和四一年

「近世伊丹酒造等の発展と小西家」柚木　挙　伊丹資料　書八下巻解題平成四年

「多紀郷土史考」奥田楽々斎　臨川書店　昭和三三年

「伊丹の年中行事」「伊丹の民謡とわらべうた」「伊丹の仕事唄・盆踊り歌」「伊丹の伝説」伊丹市教育委員会編　昭和五〇―五三年

「伊丹の酒造り道具」牧野由起子　伊丹市文化財保存協会　昭和五三年

「聞き書き伊丹のくらし」伊丹市立博物館　平成六年

「伊丹郷町物語」真鍋禎男　伊丹市　平成二年

「ささやま風土記」篠山地方観光協会編　昭和五六年

「伊丹―城と酒と俳諧と―」安達文昭　近代文芸社　昭和五八年

「謎の丹波路（新版）春木一夫　神戸新聞出版センター　平成六年

「日本酒ルネッサンス」小泉武夫　中公新書　平成五年

ほかに「江戸時代」「日本酒」の関係書

## 家具卸

**株式会社 アート50**

Create a new fumiture.

〒664 伊丹市北伊丹7丁目98番地
TEL(0727)75-3311(代)・(0727)70-6468(代)
FAX(0727)84-1136

## 民防エアコン工事は伊丹家電事業協同組合へ!!

民防エアコンの入れ替え工事はもうお済みですか？
お申し込みは近くて安心！アフターサービスが完全な
地元の「**町の電器店**」をお選び下さい！
(組合加盟店)

民防エアコンのお申込は
(定休日：日曜日)

**建設業許可を受けている伊丹市内唯一の「でんきやのくみあい」**
伊丹家電事業協同組合☎**0727-75-1000**(代表)

## JAS 日本エアシステム

**新発売**

伊丹
**地酒水ようかん**
口当り、香りの良さが自慢です。

新しい味です
**福住**

登録 藏元 銘菓 商標

本店／伊丹市梅ノ木町2丁目3－35 ☎0727-72-2020
支店／阪急東商店街 ☎0727-72-1340
支店／阪急伊丹ターミナルデパート ☎0727-72-3506
支店／塚口さんさんタウンB1 ☎ 06-427-8025
支店／JR伊丹アリオ1 ☎0727-73-0001

伊丹市千僧1丁目1番地
伊丹市役所市民文化部文化振興課内

## ふるさと伊丹の文化を育てる会

電話 0727-84-8043

丹波地酒、生酒、専門店

# いながき酒店

ローソン今田町店隣り
TEL 0795-97-2003

LIQUOR, WINE & FOODS

# 川口酒店

篠山町宮ノ前277 ☎(0795)56-2022

Green Dolphin
地酒と音楽の酒屋

地酒屋 グリーンドルフィン

篠山町郡家852
TEL 52-3311

和洋酒・贈答品

# ツルヤ食料品店

篠山町デカンショ通り
TEL 52-0129

丹波の地酒 鳳鳴

# ひわだ酒店

篠山町下二階町 (52) 0224

毎度有難とう御座居ます
御座敷スナック
# まえがわ
電話 56−2135

和洋酒・贈答品
# 米忠酒店
兵庫県篠山町呉服町
TEL 0795-52-0066

兵庫県多紀郡篠山町畑宮２７７
# よろずや酒店
☎0795-52-2352

和洋酒・贈答品 **和田秀商店**
ほっかほっか亭® 篠山南新町店
代表 石田秀二
篠山町南新町308
TEL(0795)52-0381
FAX(0795)52-1564

お食事処
牛とろ丼
そばとろ
# 大手食堂
弁当
仕出し
篠山町二階町 TEL(52)0660

丹波杜氏の里

清酒 秀月

狩場酒造場

〒669-21
兵庫県多紀郡丹南町波賀野500
TEL (0795) ９５－００４０番
FAX (0795) ９５－０４２１番

酒は黄桜

清酒製造業

櫻酒造株式会社

多紀郡篠山町井ノ上１８２の１

灘で育った粋な男酒

清酒 寿海

西宮市浜脇町４番２６号 百萬石酒造株式会社

丹波の地酒

鳳鳴

音楽振動酒

夢の扉

兵庫県多紀郡篠山町呉服町7-3 鳳鳴酒造株式会社 TEL (0795) 52-1133

清酒 黒松 大観

醸造元 打田酒造株式会社
打田とし

兵庫県氷上郡氷上町谷村５２０　TEL 0795－82－0002

姫飯造り
清酒 花鳥 赤 鳥

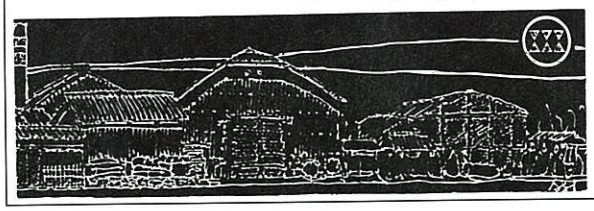
鴨庄酒造株式会社 市島町上牧661-1 ☎85-0488

手造り丹波の酒

氷上郡市島町
中大槻酒造場
TEL (0795) 86-0003

清酒 玉つるぎ

丹波発、今を疾走る
The造り酒屋



丹波美酒 川鼓

兵庫県氷上郡市島町中竹田1171
醸造元 西山酒造場
TEL：0795 (86) 0331 (代表)
FAX：0795 (86) 0202

創業江戸享保元年

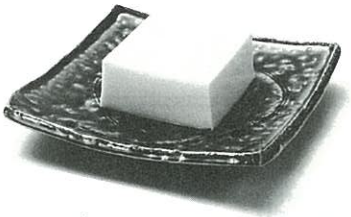
山名酒造株式會社

清酒 萬歳 醸造元

水が育てたのは、
名酒だけではありません。
水が命とされる
豆腐づくりにとっても、
篠山はこのうえない環境です。
おか屋は、
この地で豆腐を作り始めて、
およそ百年になります。

## 丹波篠山の水が育てた もうひとつの名品。

そして生まれたのが、
丹波篠山銘水豆腐「古都の霧」。
おかげさまで、発売以来、
味に厳しい多くの方々から
高い評価を頂戴いたしております。
篠山で生まれた
もうひとつの名品の味。
ぜひ一度、ご賞味ください。



丹波篠山
銘水豆腐屋
おか屋

篠山の味覚を全国にお届けします。フリーダイヤルで、お問い合わせください。 0120-338-034
おとうふは ささやま のみず

# 人と自然が共生する 丹波の森のエコロジカルリゾート

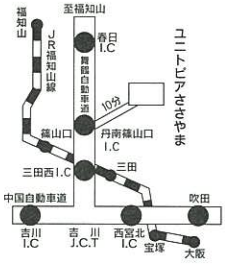
270,000㎡の自然の中は「花の植物館」をはじめ、緑豊かな水辺の宿泊施設、キャンプ場、研修施設、別荘、フィールド施設そしてグルメと、利用の仕方はさまざま。
今、新しい時代のリゾートとは何かを「ユニトピアささやま」は、四季折々の花と香りにつつまれた広大なグリーンの中から人々に呼びかけています。

## 交通のご案内

### 大阪・神戸から車でも、電車でも1時間!

**道路**
中国自動車道吉川J.C.Tから舞鶴自動車道へ入り2つめのインター丹南篠山口インターから10分。

**鉄道**
大阪駅からＪＲ福知山線に乗り約１時間。篠山口駅下車、タクシーで10分。
土曜、日曜、祝日、夏休み期間中はバス運行。




■お申込み、お問い合せは…

**ユニトピア ささやま**

〒669-23 兵庫県多紀郡篠山町矢代
ＴＥＬ (0795) 52-5222(代)
(0795) 52-5227(予約専用)
ＦＡＸ (0795) 52-2234

清酒 大関

# 辛丹波

本醸造 淡麗辛口

## 米、水、技。
## 丹波の幸の結晶。

丹波は、米と水の宝庫。そして、何代にもわたって酒造りに生きる、丹波杜氏のふる里。
この恵まれた環境で丹念に醸し出された『辛丹波』。
キリッと冴えた飲み口の淡麗辛口です。

上撰1.8ℓ 瓶詰

上撰300㎖ 瓶詰

未成年者の飲酒は法律で禁止されています。
お酒はおいしく適量を。

大関株式会社

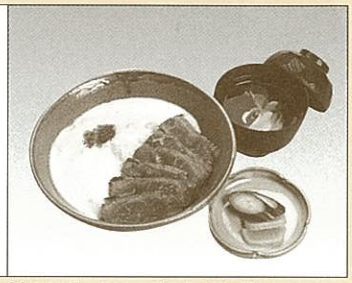
## ふるさとの情報発信基地

特産館全景

### 特産素材を生かした
### 四季折々の郷土料理……

無文銭弁当（青山）

山の芋　とろろ豆腐



篠山牛肉　牛とろ丼

**全国に誇る特産品**

JAささやま

篠山町農業協同組合 **特産館ささやま**

〒669-23　兵庫県多紀郡篠山町黒岡70
TEL.0795－52－3386
FAX.0795－52－4010

丹波黒 250ｇ　大納言 250ｇ

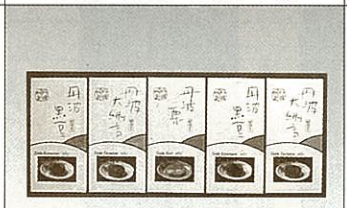
山ノ芋

2kg、3kg、4kg、8kg

篠山産米
コシヒカリ

5kg、10kg

丹波黒煮豆 500ｇ　栗甘露煮 540ｇ　栗納言 540ｇ



栗ゼリー　200ｇ×1
大納言ゼリー　200ｇ×2
黒豆ゼリー　200ｇ×2

黒豆おかき

大判　36枚